

井上靖「玉碗記」論

——考古学の引用——

はじめに

井上靖は新聞記者から転身した作家の一人である。井上を「足で書く作家」^①と評したのは山本健吉であるが、井上の取材能力が高く評価されていたことの一つの証左にもなる。確かに、井上の作品群（特に歴史小説）は、膨大な資料（史料）に支えられた、「歴史的」に確度の高いものとなっている。そして、その確度が作品の評価に少なからず影響を与えていることは否めない。また、作品だけではなく、井上の取材に対する姿勢というものにも注目すべきだろう。

本稿で扱う井上靖「玉碗記」は、「文芸春秋」昭和二十六年八月号（第二十九卷第十一号）に掲載され、その後短編集『ある偽作家の生涯』（昭和二十六年十二月二十日、創元社）に収録された。こ

山 田 哲 久

れまでの研究では「歴史小説」として分析されている作品である。しかし、本稿では「玉碗記」が「歴史小説」であるかどうかのジャンルの問題には触れない。

「玉碗記」は、「安閑天皇」の「玉碗」の「発見」を中心に据えたもので、実際の事件を題材にした作品である。事件をそのまま書けば、それは新聞記事になる。しかし、井上は「玉碗」の「発見」という事件を一つの作品に仕上げている。ここでは、実際の事件は作品に引用されていると考えるべきだろう。引用されるのは事実としての事件だけではない。その事件が事実であることを示すために、「玉碗記」には、様々な書物からの引用が見られるのである。本稿の目的は、「玉碗記」に引用されたものが、作品内でのどのように機能しているかを分析することである。

一、「玉碗記」執筆まで

——「西琳寺の玉碗」の発見——

昭和二十五年八月十二日のことである。毎日新聞大阪本社で開催された、河内郷土文化研究会主催の「西琳寺講演会」の会場に一つの器物が持ち込まれた。「玉碗」である。「夕刊毎日新聞」は、「西琳寺の玉碗」を発見する 明治初年来行方不明中の国宝級」との見出しの記事で、「玉碗」の写真と共に、その様子を次のように伝えている。^②

明治初年以来行方不明となっていた大阪南河内郡古市町の名刹西琳寺の宝物「玉碗」の所有者があらわれた——十二日毎日新聞大阪本社で開かれた河内郷土文化研究会主催の「西琳寺講演会」の会場へ布施市荒川三、行松勢二氏（二一）が同家に伝わる「玉碗」の鑑定を求めたが講師東京国立博物館石田茂作博士が鑑定したところこの「玉碗」こそ長年探し求めていた西琳寺宝物の随一といわれる「玉碗」であることが判明、近づく文化財保護法の施行を前に関係者らを喜ばせている

本稿で扱う「玉碗記」は、この「西琳寺」の「玉碗」を題材にしている。次に「玉碗」に関する記事が掲載されるのは、同年十月二十九日である。この間も、「考古学雑誌」や「史迹と美術」など、

考古学の分野では、熱心な議論が行われている。さて、昭和二十五年十月二十九日付の「毎日新聞（大阪）」では、「正倉院白玻璃碗と同一の作か 梅原京大教授「西琳寺の玉碗」を調査」との見出しで、次のような記事が掲載されている。

約千四百年前、安閑陵に副葬品として埋められたのが徳川初期頃発掘されてその後明治初年以來、行方不明となっていたわが国稀有の古代ガラス器「西琳寺の玉碗」は布施市荒川三、行松勢二氏家伝のものとして所有していたことが判明去る八月東京国立博物館、石田茂作博士が国宝級の逸品と折紙をつけたがかねて古代ガラス器の調査を行っていた京大教授梅原末治博士は同碗の本格的調査にのり出し同類型のものとみられる正倉院御物、白玻璃碗と比べて研究するため二十六日行松氏方から問題の「玉碗」をとりよせ正倉院で御物と対照調査を行った。

ここまでの記事で整理できるのは、以下の事実である。まず、「玉碗」の発見は、昭和二十五年八月十二日に「毎日新聞大阪本社」で開催された「西琳寺講演会」の会場であったこと。また、それを鑑定したのは、「西琳寺講演会」の講師を務めた「東京国立博物館石田茂作博士」であったこと。そして、同年十月二十六日に「京大教授梅原末治博士」によって、「正倉院」において、「正倉院御物」である「白玻璃碗」との「対照調査」が行われ、その結果「白玻璃

碗」と「同一人の作」であるという結果が導かれたこと。以上である。つまり、「玉碗」の発見から、「対照調査」まで、「玉碗記」で扱われる事件は、忠実に事実を反映していると言える^③。

ところで、他紙を調査しても、「玉碗」の「発見」に関する記事は見られない。毎日新聞社が取材を独占した事件だったようである。当時、「東京本社出版局」に異動していたと言え、依然毎日新聞社の社員であった井上は、この「玉碗」に関する情報に事欠かなかっただらう。

二、調査の周囲

——情報提供者・加藤三之雄——

では、井上は「玉碗記」執筆にあたって、具体的にはどのような調査を行ったのだろうか。先行研究ではこの調査の経緯について論じられたものはない^⑤。また、井上自身の発言も残ってはいるが^⑥、執筆にあたっての調査については、詳しい事実関係が判然としないので、ここで検討しておこう。

まずは、「玉碗記」の中に登場する書物について整理しておく。「玉碗記」には、書名が明示されている書物が四冊引用されている。いずれも「玉碗」についての言及がある。「河内名所図会」、三浦蘭阪『河内撫古小識』、大田南畝『一話一言』、藤井貞幹『集古図』、

これら四冊の入手経路から確認しよう。

井上は自作についての発言が非常に多い作家である。本稿で扱う「玉碗記」についても、何度かその創作過程について発言している^⑦。「安閑天皇の玉碗」（昭28・1）では、「玉碗」発見の経緯を述べた後、執筆の動機として次のように述べている。

私は全くの門外漢であるので、その玉碗がそうした史的価値を持つものとは全く知らずたまたまその発見に関与した毎日新聞社（大阪）の論説委員長加藤三之雄氏よりその話を耳にした時、その持つ運命的なものに創作意欲を刺戟され、一篇の小説に書き上げたまでのことである。（傍線引用者）

ここでは、井上の「玉碗記」執筆のきっかけが「毎日新聞社（大阪）の論説委員長加藤三之雄氏」からの「話」であったことが分かる。また、作品の内部に関しては「玉碗」の持つ「運命的なものに創作意欲を刺戟され」と述べている。そして、続けて前述した四冊の書物について、次のように述べている。

玉碗が発見されたのは、昭和二十五年の十月の中頃である。大阪毎日新聞社の講堂で石田茂作博士の「西淋寺と飛鳥文化」という講演が開かれたが、その席へ同博士の鑑定を乞うために持ち込まれたのが、西淋寺旧蔵の宝物として江戸時代には二、三の書物（『河内名所図会』、三浦蘭阪『河内撫古小識』、大田

南畝『一話一言』、藤井貞幹『集古図』にも記載され、明治の初め廃仏毀釈の余波を受けてどこかに行方不明になってしまった玉椀であった。

私がこの話を加藤三之雄氏から耳にしたのは、この講演会が開かれてから何日も経っていない時で、発見された玉椀と御物の「玻璃椀」の二個が奈良の正倉院で梅原末治博士の手で対照調査が行われる少し前であった。

加藤氏の斡旋で、私もその席へ見学に行く手筈になっていたが、出発前に発熱していくことが出来なかった。

「玉椀」の「発見」を「昭和二十五年の十月の中頃」と述べているのは、井上の記憶違いであろうが、それよりも、この文章からは事実関係が判然としない書き方ではあるが、前述の四冊が加藤氏からの情報提供による資料ということが分かる。また、その調査に「発熱」のため、「いくことが出来なかった」ことも分かる。『井上靖全集』（別巻）所収の「井上靖年譜」においても、当時の井上の足跡ははっきりしない。そこで参考になると思われるのが、次に紹介する資料である。

ここに一通の手紙がある。差出人は件の加藤三之雄氏。宛先は「東京本社出版局／毎日情報編集部／井上靖様」とある。以下にこの手紙の全文及び同封資料について紹介する。数字は便箋の枚数を

示し、／は改行を示す。また判別不明の文字は□で記す。

①
お手紙ありがとう。廿六日の梅原教授の二つの／玻璃椀対照調査へ同封廿九日附本紙（大阪）所／載の記事の通り予定通り行はれました。／同席した例の横山氏の話によるとあの正倉院の廊下に緋毛氈を布いて二つを並べた／ところいかにも晩秋の日を受けていさ、か黄色／をおびて和く輝いているところ、本当に別れ／ていた二人が奇しくもこの日めぐりあったという／感じで、梅原氏もすっかり感慨しよう／玉椀の方ハ京都へもって帰ってしまったそう／です。あの折一寸お話しした通り最初／鑑定したのは奈良国立博物館の石田／茂作博士で、かねて同博物館に買いあげたい／

②
という意向をもっているのですが、何しろお役所の／ことで金が急に間に合はないのでせつかちに梅原／先生ハ自らが十万円ぐらゐ直ぐにつくって来る／といきりたっている始末。小生ら中にたつものも／これにハ少々困っている形です。内□ハ所有／者に返すことハなくする危険かすかにある／ということ、出来るならば、博物館に収め／たいものと思っております。／小説に書かれたら大変結構と存じますが／お書の折藤井貞観の集古図、太田／南畝（蜀山人）の一話一言、河内名所／図絵など安閑天皇陵から出土のことを

／記しているもの御一覽願ひ度く、同時／に日本書記安閑天皇の項もちらつと／

③ のぞいておいて頂けたら結構と存じます。／あそこには愛宕春日山田皇女の首飾りを／盗まれたということがホンのちよっぴり出ています。／もし玉碗の主題をこの／あたりに求められるならばこの一件と／玉碗とをからませるのも一案だと、これハ／横山氏の申し草です。但し小生など／にハ河内の上代のこうした宮廷の模様というものがどうもはつきりした映像になって来ません／また事実史実というものがまことに乏しいのです。もし大兄がこのへんのこととしても／詳しいこと聞き度いと仰れば、(今度御下阪の節)小生として／もつとも適当な老学者を御紹介する／用意ハあります

④ 兎も角手もとにあった玉碗と中箱、外箱／一式、並に正倉院御物の方の複製寫し／も同封お目にかけておきます。／外箱の裏の文字ハこの間申上げた古市村／庄屋が西琳寺へ寄進したことを記したものの、中箱(漆、金文字)の方ハ加茂保考／という書家が「御鉢」と銘を奉ったこと／とを記しているものです。このことは蜀／山人の一言に詳しく出ています。／こうして西琳寺什宝として、著名であった／のが明治初年の排佛毀釈で同寺も苦境／に陥り当時の住職が

手ばなして行方／不明となっていたのです。／右取り敢へず御返事旁々お知らせ／

⑤ いたしておきます／先日概要をお話したとき大兄□□□□／を指されたように別れていた二つ／小生としてもこの二つを双生児のように西域か／ら支那へ、支那から朝鮮へ、そして日本へ／と永の旅路を共にしたものと考へたいの／です。記事のうちのこのくんだりも実ハ、小生の／加筆ですーが邂逅したことがやま／□□□□です。そしてそれがうっかりすると／又なくなる危険のあることも十分運命的／なものを考へられます。そうなつては大／変ですが。 十

月廿日 □□□□

井上靖兄 □□

以上の内容の手紙と共に石田茂作「資料紹介西琳寺白瑠璃碗」の論文の抜刷が同封されている。また、右の手紙が収められていた封筒には、「東京本社出版局／毎日情報編集部／井上靖様／北川兄成るべく早く／井上君にお届け願ひます 加藤／十月三日／大阪総務局／加藤三之雄」と記されている。宛先は記されていない。おそらく毎日新聞社内の郵便物としてまとめて郵送されたものだろう。

加藤氏の手紙が書かれた便箋は毎日新聞社（大阪）のものである。冒頭に「お手紙ありがとう」とあることから、この加藤氏の手紙が、井上からの手紙への返信であることは予想がつく。その井上の手紙の内容については、次の加藤氏自身の述懐が参考になる。^⑩

先に述べた梅原氏による「姉妹器」の対面があつて間もなくのことである。（中略）戦後私はベルリンから帰つて、大阪本社でしばらく編集局次長という職にあつたので、しぜん井上君とは直接話し合うこともあつてよく識つていた。それを聞いて「井上さんに玉碗を小説にしてもらえまいか」と突飛なことをいいたしたのは横山氏である。とにかく耳に入れようといつておいたが、その頃もとの職場である毎日になつてしまふといふ姿を出していた井上君にその話をする、一度うかがいましよう、といふことで、間もなく安閑陵前の横山邸で井上君を迎えることになつた。「玉碗」発見以来の経過をいかつて二人で話すと、井上君はメモを取つて帰つたが、それから間もなく「林芙美子に百枚のものを頼んでいた文芸春秋が、林さんの病気で、急にピンチヒッターを僕に頼んで来たので、あれを題材にして書こうと思うのでご了承がいたい」という手紙が私あてに来た。むろん願つてもないことなので了解の返事を出しておく、間もなく同誌にのつたのが「玉碗記」である。（傍線引用者）

つまり、この加藤氏が井上に宛てた手紙は、「玉碗」を題材とした小説を執筆することを「了解」した手紙であるということが分かる。また、その他にもこの手紙からは以下のことが分かる。「対照調査」に井上は参加していないということ。三浦蘭阪『河内掘古小識』を除く前述の三冊の書物は、加藤氏の進言であつたこと。また、「日本書紀」の記述を「玉碗記」の内容に組み込む点については、「横山氏」の進言であること。そして、二つの「玉碗」（西琳寺の玉碗と正倉院白瑠璃碗）が「邂逅」した点に注目したのは、井上であつたこと。またこの手紙と加藤氏の文章を併せて考えると、井上は「対照調査」には参加していないが、現地に取材に赴いていることが確認できる。^⑪以上の点が指摘できる。少なくとも、「玉碗記」執筆に際しては、加藤氏と横山氏の協力があつたという事実が立証されるのである。

しかし、「協力」という言葉は、「制限」という言葉に変わりはないだろうか。つまり、「玉碗」の「発見」をめぐる背景が、井上の執筆に「制限」を与えていたとは考えられないだろうか。井上は後に次のように述べている（「安閑天皇の玉碗」）。

「玉碗記」の方は、それが発見された直後ではあつたし、それが学界から注目されるべき価値を持つとしてゐる矢先であつただけに、あまり自由な想像を駆使することはできず、作品と

しては自分ながら出来な物になってしまったと思つてゐる。ここまでの分析と、この井上自身の発言を踏まえて、作品に戻つてみると、「玉碗記」はこの加藤氏の進言を悉く作品に取り入れていることが分かる。前述の四冊の書物の引用や、「日本書記安閑天皇の項」の引用、そして、「愛宕春日山田皇女の首飾りを盗まれた」ということ「は「瓔珞（首飾）の盗難事件」という形で作品に反映されている。もちろん、「玉碗記」という作品自体が、加藤氏や横山氏の進言だけを元に構成された作品であると、ここで述べるつもりはない。しかし、「玉碗」の「発見」という事件の性質から、やはり執筆に際して、いくらかの「制限」があつたのではないだろうか。それが最も顕著に表れている箇所が、次に示す四冊の書物の引用の形なのではないだろうか。

三、書物の引用——「玉碗」自体が持つ物語——

井上は「安閑天皇の玉碗」で、次のように述べている。

この玉碗については、二十五年の秋、「史迹と美術」二〇九号に梅原末治博士が「安閑陵出土の玻璃碗に就いて」という文章を発表しているし、藤沢一夫氏が同じ雑誌の二〇七号に「安閑天皇陵発見の白瑠璃碗」という一文を寄せている。さらに同じ頃「考古学雑誌」三十六巻四号に、石田茂作氏が「西淋寺白

瑠璃碗」というかなり詳細な報告を載せている。それから少し遅れて藤沢一夫氏が、再び「あしかび」一号に「玻璃碗の驚異」という文章を発表している。

ここで、「毎日新聞」で大きく取り上げられた「玉碗」の発見が、考古学の分野において大きな期待を持って取り上げられた事件であつたことが分かる。そして、井上が言及している論文である。この内、石田茂作氏「西淋寺白瑠璃碗」については、前掲した加藤氏の手紙に同封されていたものである。これらの論文には前述の四冊の書物についての言及がある。「玉碗記」執筆にあたって、井上これらの論文を参照した可能性は高い。

では、まずは「玉碗記」における四冊の書物の引用部分を確認しておこう。作業の性質を考へて、本文の引用は初出の文章を底本とする。「玉碗記」には、前述の四冊の書物について、以下のように記されている。

享和元年刊の『河内名所図会』の古市郡西琳寺の條には、玉碗 当山の什宝也、互四寸、深式寸八歩、巡り、底、一面に星のごとく円形つらなる。玉性分明ならず、これは今より八十年前、洪水の時、安閑天皇陵の土砂崩れ落ち、其中より朱など多く出で、これに交りて出るとなり、其地は村内、田中何某といふ農家の持

地なり、当寺に蔵む

とあり、文化元年版の三浦蘭阪の『河内撫古小識』の西琳寺の條にも、

玉盃 安閑帝陵畔所出

と見えている。当時河内西琳寺の寺宝として余程有名だったものと見える。

また蜀山人、大田南畝の「一話一言」にも、河内古市玉碗記として、国栖景雷と京都の茶人宗達とが撰した二つの文を記録しているし、藤井貞幹の「集古図」にはこの玉碗の図が載っている。

「一話一言」所録の国栖景雷の文には、

兵華の後、里の民、此御陵をあばきしにや、此の里の長、神谷といふ者の奴僕土中より玉盃一を獲たり、其家に納ること百余年にして終に西琳寺に寄附す

とある。

いずれも書物からの引用の形を取っている。なお「兵華」は、初刊の状態で「兵革」と訂正されている。これらの文章はどこから引用されたもののだろうか。まずは、参照した可能性の高い、前述した四つの論文から検討すべきだろう。これらの論文にも、四冊の書物の一部が引用されているからである。以下、それぞれの論文の

引用箇所を確認する。

まずは、加藤氏の手紙に同封されていた、石田茂作「資料紹介西琳寺白瑠璃碗」である。この論文には、「河内名所図会」への言及があり、次のように記されている。

此の器について享和六年版の河内名所図絵は「玉碗、当山の什宝亘四寸深さ二寸八歩巡り底一面に星のごとき円形連る。玉性分明ならず。これは今より八十年前洪水の時、安閑天皇陵の土砂崩れ散って其中より朱など多く出て、これに交って出るとなり。其地は村内田中某といふ農家の持地なり。当寺に蔵む」とある。

小説「玉碗記」に引用された箇所と相当する箇所についての引用である。ただし、「碗」が「碗」になっていたり、「也」が省略されていたり、「崩れ落ち」が「崩れ散って」となっているなど、異同が散見される。また、この石田論文には、「一話一言」の文章も引用されている。「玉碗記」の文章に対応する箇所は次の通りである。

兵革の後里の民此御陵をあばきしにや、此の里の長神谷といふ者の奴僕土中より玉盃一を獲たり。其家に納ること百余年にして終に西琳寺に寄附す。

句読点の箇所は異なるが、漢字の異同は見られない。ほぼ、「玉碗記」本文と対応すると言っていいだろう。

次に、対照調査を実際に行つた梅原末治の論文である「安閑陵出土の玻璃碗に就いて」に移ろう。この論文にも、「一話一言」の引用が見られる。

所が玻璃碗の出土に就いては、右の外に、君も引用していられる『一話一言』中に載せてある寛政八年四月国栖景雷の書いた文中に、別個の重要な記事があつて、それには

(前略) 兵革の後里の民此陵をあばきしにや、此の里の長、神谷といふ者の奴僕土中より玉盃一を獲たり、其家に納ると百余年にして終に西琳寺に寄附す。

とあります。

ここでの「一話一言」の引用も、「玉碗記」の該当箇所と一致する。また、これも石田論文の引用と同じく、句読点以外は「玉碗記」と相当する。もつとも「一話一言」は、「玉碗記」執筆当時、これらの論文以外でも、比較的安易に参照することが可能である。例えば、『日本随筆大成』所収の「一話一言」である。『日本随筆大成』における該当箇所は以下である。

兵革の後里の民此御陵をあばきしにや、此の里の長神谷といふ者の奴僕、土中より玉盃一を獲たり、其家に納ること百余年にして、終に西琳寺に寄附す、

これについても、前掲の二つの論文と同様である。句読点以外は、

全て一致する。句読点の位置を除いた箇所が一致するのだから、これらの中から、井上が「玉碗記」の典拠としたものを特定するのは、困難である。加藤氏の手紙に同封されていた、石田論文を句読点の位置を変えて引用したと考えるのが、もつとも妥当だろうか。

さて、では次に藤沢一夫「安閑天皇陵発見の白瑠璃碗」の考察に移ろう。「玉碗記」の該当箇所については、以下のように記されている。

西琳寺の玉碗と云うのは『河内名所図会』(享和元年刊)の古市郡西琳寺の条に

玉碗 当山の什宝也、互四寸、深式寸八歩、巡り、底、一面に星のごとく凹形つらなる。玉性分明ならず、これは今より八十年前、洪水の時、安閑天皇陵の土砂崩れ落ち、其中より朱など多く出で、これに交りて出るとなり、其地は村内、田中何某といふ農家の持地なり、当寺に蔵む。

とあり、出雲行者、三浦蘭阪の『河内撫古小識』(享和三年序、文化元年跋)西琳寺の條に

玉盃 安閑帝陵畔所出

と見えていまして、当時この寺の名物として著聞のものであったことが知られます。また蜀山人、大田南畝の『一話一

言」にも「河内古市玉碗記」として国栖景雷と、京都の茶人宗達とが撰した二つの文を録しています。藤井貞幹の「集古図」には図が載って居り、

先ほど示した「玉碗記」の本文と比較してみれば、内容だけではなく、文章の構造まで対応していることが分かる。「玉碗記」の該当箇所の記事は、この藤沢論文を引用したものと考えるのが自然ではないだろうか。もともと、「玉碗記」執筆のために、井上が古市を訪れていることが加藤氏の文章から確認できるため、これらの書物を実際に見た可能性も否定できない。しかし、執筆に際しては確実な論文からの引用という形をとったのではないだろうか。次の箇所についても同じことが言える。

これらの旧記からすると、玉碗は出土後百余年神谷家（『河内名所図会』では田中家）に伝えられ、後西琳寺に寄進されたものであるが、国栖景雷の記事が書かれたのが寛政八年だから、その出土の年は寛政八年からどんなに少なくとも百余年溯った時代で、元禄年間と見なければならぬわけである。

「玉碗」の出土の年についての文章であるが、この箇所については、次の梅原論文を踏まえていると考えられる（「安閑陵出土の琥珀碗に就いて」昭26・2）。

この記事からすると出土後百余年間神谷家に伝えられた後、

西琳寺に寄進したことになるので、その出土の年は記事の書かれた西暦一七九六年たる寛政八年から百余年に更に若干の年を加へた頃とせなければなりません。いま仮に百年としてもそれは元禄九年になるので（後略）

ここでも、忠実に論文の内容を踏まえた文章になっているのである。井上は、このように「玉碗」の「発見」の経緯と、「玉碗」についての分析に関係する文章については、慎重に扱っていると言えるのである。

しかし、ここで注目したいのは、そのような井上の態度ではなく、引用の形である。書名を明示し、おぼろげな記憶に従って書くのではなく、確実な研究論文からの引用を行うことによって、「玉碗記」という作品にはどのような特質が付与されたのであろうか。

ここまでの検討によつて、「玉碗」の「発見」という事件は、いわばそれ自体が一つの物語であったことが分かる。また、その「発見」の物語を支えているのが、「玉碗」自体が持つ物語である。「玉碗記」は、二つの「器」の「邂逅」を一つの物語として捉えているが、それは「玉碗記」独自のものではない。例えば、前掲した「毎日新聞」の記事では、次のように書かれている^⑬。

もしこの二つがいずれのころか一対のものとして大陸から渡つたものとしたら一方は土中に埋もれ一方は正倉院の倉におかれ

千数百年ぶりに邂逅したことになる。

二つの「玉碗」が「千数百年ぶりに邂逅」することは、その事件自体が物語性をはらんでいる。そして、その物語性を担保するものが、考古学的な見地である。「玉碗」の素性を分析した学術論文によって、「玉碗」が「安閑天皇の玉碗」であると立証されることにより、その妃である「春日皇女」が召喚され、二人の物語に変換されるのである。

そして、それらの論文からの引用を行うことによって、「玉碗記」はその物語を過不足なく、作品内に取り込むことになるのである。では、その物語を取り込むことによって、「玉碗記」におけるもう一つの物語はどのような影響を受けているのであろうか。

四、もう一つの物語

——二つの物語の結合点——

この「玉碗記」という作品は大きく分けて二つの物語から成立している。一つは、ここまで検討してきた①「玉碗」発見をめぐる経緯と「玉碗」自体が持つ物語である。そして、もう一つが②「木津」と「多緒」の悲恋―互いの愛情への疑惑―をめぐる物語である。これら二つの物語が互いに関係するのがこの「玉碗記」という作品である。

これまでの調査を踏まえると、①と②の関係を浮上させることができる。①は主に、井上及び協力者による調査を踏まえた物語である。これは、前述したように、「玉碗」自体が持つエピソードそのまま物語になる。そして、この①に②をどのような形で関係させるかが、「玉碗記」という小説の持つ方法であると言える。

語り手である「私」は、冒頭で「玉碗」に興味を持った理由を、それが「安閑天皇の所蔵品であった」からだと述べた後、次のように語っている。

私に安閑天皇の名とその妃春日皇女の名を、今日まで私の記憶から消えることのないようなある種の感銘で刻み込んだのは、私の義弟の木津元介であって、十年程前のことである。

「私」が「玉碗」に興味を持った理由が、「木津元介」という人物によって説明されている。つまり、「玉碗記」という作品の全体像を見渡した時、冒頭でこのような文章が配置されることによって、①と②の物語が関係し合いながら進行していくことを読者に予感させるのである。「私」は念を押すように次のように語る。

史的興味とか美術的興味というようにはっきりと形を整えている関心の持ち方ではなく、ただなんとなく、安閑天皇に関するある品なら見ておいてもいい、そんなその時の私の気持の動き方であったのである。

引用される箇所とは違い、「私」は一見「史的興味」とは距離を置いているように見える。実際に、「私」は「対照調査」の途中で席を外してしまう。

しかし、「私」が「玉碗」に興味を持ったのは、それが「安閑天皇」に関係のあるものだからである。言い換えれば、「玉碗」が「安閑天皇」のものでない限りは、「私」は「玉碗」に興味を示さない。では、「玉碗」と「安閑天皇」の接続は何によつて保証されるのだろうか。それは、考古学の成果を引用することによつて保証されるのである。

つまり、この「玉碗記」という作品の方法は、次のような文章に象徴されているのではないだろうか。

明日二つの往古の器物が同じ場所に並べられることを思い出すと、突然大きな感動が私の脊を突き抜けて行くのを感じた。それは二個の器物によつて象徴されている安閑天皇と妃の長く相離れていた愛情が千何百年かの歳月を隔てて、再び相会うことを意味しているように、そして決してそれ以外の何ものでもないように、その時の私には思えたからであった。

この文章では、「二個の器物」がそれぞれ「安閑天皇」と「妃」の愛情の「象徴」として捉えられている。そして、「私」は「二個の器物」の「対照調査」を、「長く相離れていた愛情が千何百年か

の歳月を隔てて、再び相会うことを意味している」と捉えている。

この「私」の解釈には一つの前提がある。それは「玉碗」が「安閑天皇」のものであるという事実である。この事実は、最初から確定したもの（つまり読者が共有できるような常識）ではなく、作品の中に、考古学の成果を引用することによつて、成立する事実なのである。そして、この文章を踏まえた形で、次のように語られる。

木津の愛情と多緒の愛情が、二個の往古の器物のように、いつか相会うことがあるであろうか。そんな日がいつかやって来るまで二人の悲しみは決して消えることなく、今もこの晩秋の清澄な空気の中を流れているのかも知れない。

ここでは、「木津の愛情と多緒の愛情」が「二個の往古の器物」に仮託されているのだが、ここに「玉碗記」における引用の機能を見ることが出来る。つまり、忠実に考古学的見地に依つた引用の機能である。「二個の往古の器物」が、特に「発見」された「玉碗」が、「安閑天皇」の「玉碗」である保証がなければ、「木津」と「多緒」の「愛情」を、「器物」に仮託することは出来ない。「玉碗記」では、「発見」された「玉碗」が、確実に「安閑天皇」のものであることを示す必要があつたのである。そのような作品の方法が、前述した引用の形を導き出したのである。

おわりに

「玉碗」の「発見」は、地域に限定されたものとは言え、考古学界にとっては一つの事件であった。その事件を小説として扱うことそれは、毎日新聞の美術記者を長い間勤めた井上にとつて、言わば培った技術を発揮する機会でもあつたはずである。井上は、事実を事実として扱い、またそうすることによつて、その事実新しい物語を加えていくという方法をとつた。そして、その加えられた物語は、考古学的正しさに支えられているのである。「玉碗記」では、実証的に立論された考古学の成果を根底に置き、それらを引用することによつて作品を構築していくという方法が採られたのである。

注

- ① 山本健吉は河盛好藏・河上徹太郎・山本健吉・白井吉見・吉田健一「井上靖の魅力―座談会による現代作家論―」（『文学界』第十三卷第八号、昭和三十四年八月一日、文芸春秋新社）において、「あの人（井上靖・引用者注）が足で書くというのを非常に重要視したいんです。」と述べている。
- ② 「西琳寺の玉碗」発見さる 明治初年来行方不明中の国宝級」（『夕刊毎日新聞』昭和二十五年八月十五日）
- ③ 「対照調査」については、事実と作品との間で多少のズレがある。「玉碗記」では、「対照調査」の日は、「十一月という月もぎりぎり押し詰

まった日」から「二、三日先」となっているが、「毎日新聞（大阪）」の記事（既出）によれば、「対照調査」の日は、「十月二十六日」となっている。

- ④ 「井上靖全集」別巻（平成十二年四月二十五日、新潮社）所収の「井上靖年譜」には、昭和二十三年「四月、東京本社出版局書籍部副部長となり単身上京」とある。また、昭和二十五年「三月、出版局付となり、本格的に創作活動の態勢に入る」とある。
- ⑤ 先行研究で、「玉碗記」を作品論として単独で論じたものはない。いずれの先行研究も「歴史小説」の内の一つとして、「玉碗記」に言及しているものである。綿本誠「歴史と叙情―井上靖の歴史文学をめぐる一断片―」（『文学碑』第九号、昭和四十二年九月一日、白の会）、曾根博義「井上靖における『歴史』」（『現代文学研究シリーズ16 井上靖』（昭和六十一年五月二十日、尚学図書）や、山崎一類「井上靖―その歴史小説考―」（井上靖「詩と物語の饗宴」所収、平成八年十二月十日、至文堂）など、井上の「歴史小説」全体についての論考は多いが、井上が「玉碗記」執筆にあたって、参照した資料などの考察はなされていない。
- ⑥ 例えば、井上靖「白瑠璃碗」（『国立博物館ニュース』第20号、昭和三十九年十一月一日）では、「私が初めてこの白瑠璃碗を見たのは、器が石田博士の鑑定を得た直後で、所有者の行松勢次氏のお宅へ向出して、そここの奥の座敷で見せて戴いた。」とある。
- ⑦ 井上自身が「玉碗記」について述べている文章は、「安閑天皇の玉碗」（『芸術新潮』第四卷第一号、昭和二十八年一月一日、新潮社）、「白瑠璃碗を見る」（『毎日新聞』、昭和三十四年十一月十九日）、「白瑠璃碗」（『前掲』の三つである）。
- ⑧ 「碗」と「淋」の表記については、初出の表記を採用した。本稿では、「安閑天皇の玉碗」の文章及び題に関しては、初出の表記を採用する。

なお、「椀」「淋」の表記に関しては、井上靖『歴史小説の周囲』（昭和四十八年一月二十日、講談社）に収録された時には「椀」「淋」の表記のみであり、講談社文庫版・井上靖『歴史小説の周囲』（昭和五十八年五月十五日、講談社）で、「椀」「淋」と書き換えられている。

⑨ 加藤三之雄「書簡（資料番号 69780）」（県立神奈川近代文学館「井上靖文庫」所蔵）

⑩ 加藤三之雄「玉椀」頼末記」（『羽曳野史』第三号、昭和五十三年三月三十一日、羽曳野市史編纂委員会）

⑪ もっとも、これらの点については、「安閑天皇の玉椀」で井上が述べていることでもある。しかし、当時の井上の足跡を確定させるためにも、この加藤氏の手紙は有効であろう。

⑫ 石田茂作「資料紹介 西琳寺白瑠璃椀」（『考古学雑誌』第三十六巻第四号、昭和二十五年十一月十五日、野村書店）

⑬ 梅原末治「安閑陵出土の瑠璃椀に就いて」（『史迹と美術』第二〇九号、昭和二十六年二月一日、史迹美術同致会）

⑭ 日本随筆大成編集部編『日本随筆大成 別巻』（昭和三年四月十日、吉川弘文館）

⑮ 藤沢一夫「安閑天皇陵発見の白瑠璃椀」（『史迹と美術』第二〇七号、昭和二十五年十一月一日、史迹美術同致会）

⑯ 「玉椀」の「出土」の年次については、梅原氏と藤沢氏で見解が異なる。藤沢氏がその「出土」を「享保の頃」（『安閑天皇陵発見の白瑠璃椀』昭25・11）と述べたのに対して、梅原氏は「元禄九年」（『安閑陵出土の瑠璃椀に就いて』昭26・2）と述べている。その後、藤沢氏が「瑠璃椀の驚異」（『あしかび』第一集、昭和二十六年四月一日、大阪府文芸懇話会）において、この梅原説を踏襲していることから、「玉椀」の「出土」の年次については、梅原説が妥当であると考えられる。「玉椀

記」では、「出土」の年次は「元禄年間」となっており、梅原説が採用されていることになる。

⑰ 「正倉院白瑠璃椀と同一の作か梅原京大教授『西琳寺の玉椀』を調査」（『毎日新聞（大阪）』昭和二十五年十月二十九日）

〔付記〕本稿で引用した井上靖の文章は、特記したものを除き『井上靖全集』全二十八巻・別巻一（平成七年四月二十日）／平成十二年四月二十五日、新潮社）を底本とする。関係資料の引用・閲覧については、井上ふみ氏、井上修一氏、神奈川近代文学館に特別のご高配を頂いた。深く謝意を示したい。